

言語変種に対する意識調査

－「ーレル」型可能表現を事例として－

辛 昭静

要 旨

本研究では、母語話者の話し言葉に急速に普及する言語変種の例として「ーレル」型（ら抜き言葉）を取り上げ、日本語母語話者と日本語学習者（第二言語環境／外国語環境）を対象に、①「ーレル」型に対する評価、②「ーレル」型に対する受容態度の調査を行った。その結果は、次のようにまとめられる。

- (1) 「ーレル」型の使用率の高い「起きる」と、使用率の低い「育てる」に対する評価を比較した結果、同じ「ーレル」型でも「育てる」よりは「起きる」の「ーレル」型に対する評価が高かった。
- (2) 場面と相手及び動詞により「ーレル」型と「ーラレル」型の使い分けを示唆する傾向が見受けられた。
- (3) 外国語環境の日本語学習者の場合は、第二言語環境の日本語学習者よりも、授業での取り入れを強く希望している様子が窺えた。
- (4) 第二言語環境の日本語学習者は、日本語母語話者よりも母語話者に浸透している言語変種を高く評価している傾向が読み取れた。
- (5) 言語変種に対する評価と受容態度において、日本語学習者の母語による違いはほとんどみられなかった。
- (6) 日本語学習者の学習環境の違いが言語変種に対する評価と受容態度に影響していることが示唆された。

【キーワード】評価、受容態度、学習環境、母語、習得ニーズ

1. 研究の目的

筆者が日本語を学んだ韓国の日本語教育では、話し言葉の学習においても一般に、フォーマルな場面に対応する伝統的な規範に則った標準的な形式しか教えない。しかし、母語話者との自然な会話、特に、カジュアルな場面でお互いの心理的距離を近づけようとする会話を成り立たせるためには、それだけで事足りるわけではない。母語話者がカジュアルな場面でよく使う変種が理解できなかったために、ミスコミュニケーションが起こることもある。フォーマルな場面に対応する標準的な形式を習得しただけでは、母語話者とさまざまな場面で円滑なコミュニケーションを図ることは難しい。生越（1991）は、最近のように日本国内の日本語学習者の数が急増し、なおかつ学ぶ目的や場所も多様化してくると、教室で習う標準語の「デス・マス」体の丁寧な表現だけでは、生活するうえで困ることもでてくると指摘している。これは、国や言語を問わず、多くの日本語学習者に共通したことである。

本研究では、母語話者がカジュアルな場面でよく使う変種を日本語学習者はどう受け入れ、評価しているのかを調べてみる。母語話者を対象とした研究はしばしば行われてきたが、日本語学習者を対象とした研究はほとんど見当たらない。

そこで、日本語母語話者の話し言葉に浸透し、若い世代では書き言葉でも使われはじめている一段活用動詞・カ変活用動詞の可能表現の変種、いわゆる「ら抜き言葉」（本研究では「ーレル」型という名称を用いる）を取り上げ、①「ーレル」型に対する評価、②「ーレル」型に対する受容態度の2点の調査を行う。①を通しては「ーレル」型に対しての感覚的な評価を、②を通しては「ーレル」型についての意見・信念を調査し、「ーレル」型に対する言語意識を明らかにすることが目的である。

調査対象は、日本語母語話者、第二言語環境の日本語学習者、外国語環境の日本語学習者に分け、さらに、第二言語環境の日本語学習者を学習者の母語により、中国語母語話者と韓国語母語話者に

結果の分析から、このような言語変種に対する (1) 母語話者と日本語学習者の比較, (2) 日本語学習者の母語による比較, (3) 日本語学習者の学習環境による比較を行い、それぞれの意識の相異を明らかにすることを旨とする。

2. 調査の概要

2.1 インフォーマント及び調査実施時期

I. 日本語母語話者 (以下, JNS と称する)

先行研究から、「一レル」型は若い世代の方でより多く用いられることがわかっている(井上・1991, 加治木・1996 等)。それを踏まえ、本研究では、10 代後半～20 代後半の学生を対象に調査を行った。従来の調査で「一レル」型が多く普及されていると言われている世代をターゲットとする。人数は、計 96 名であった。

II. 第二言語環境の日本語学習者 (以下, JSL と称する)

(1) 中国語母語話者 (以下, JSL[C] と称する)

中国語母語話者の日本語学習者は、日本語能力試験を目安とし、1 級合格以上のレベルを前提とした。国籍・人数は、中国 (17 名)・台湾 (10 名) である。調査は 2001 年 5 月～2002 年 10 月に実施した。

(2) 韓国語母語話者 (以下, JSL[K] と称する)

韓国語母語話者の日本語学習者は、日本語能力試験を目安とし、1 級合格以上のレベルを前提とした。人数は、計 50 名である。調査は 2001 年 5 月～2002 年 10 月に実施した。

III. 外国語環境の日本語学習者 (以下, JFL[K] と称する)

外国語環境の日本語学習者は、韓国語母語話者を対象とする。日本語学習者は日本語能力試験を目安とし、1 級合格以上のレベルを前提とした。人数は、計 50 名である。JFL[K] は、全く日本滞在経験のないグループと日本滞在経験のあるグループの 2 つに分けられる。日本滞在経験のない人は 18 名で、日本滞在経験のある人は 32 名 (1 年未満の人が 24 名, 1 年～3 年の人が 6 名, 3 年以上の人が 2 名) であった。調査は 2002 年 10 月～2003 年 3 月に実施した。

2.2 「一レル」型に対する評価調査

「一レル」型に対する評価の調査には、SD 法 (Semantic Differential 法; 意味微分法) を採用した。SD 法の利点の一つとして、同時に幾つかの意味の特徴を測定できることが挙げられる。「一レル」型についても、インフォーマントがどのように評価しているのかを、この方法により明らかにできると考えた。動詞による「一レル」型の使用率調査の結果(辛・2003)を参照し、「一レル」型の使用率が高い「起きる」(「起きれる (88.5%)」「起きれない (84.4%)」)と、低い「育てる」(「育てれる (19.8%)」「育てれない (16.7%)」)の 2 語を選び出した。それぞれの可能表現を「一レル」型と「一ラレル」型の 2 つの形でインフォーマントに提示し、表現から受けることが予想される評価尺度 15 項目(「良い一悪い」「標準的な一訛っている」「明るい一暗い」「正しい一間違った」「上品な一下品な」「固い一柔らかい」「形式ばった一形式ばらない」「活発な一活発でない」「早い一遅い」「安定した一不安定な」「ふつうの一ふつうでない」「分かりやすい一分かりにくい」「新しい一古い」「好きな一嫌いな」「丁寧な一乱暴な」)を用意し、7 段階による評定を求めた(「良い一悪い」の例; ⑦非常に良い, ⑥かなり良い, ⑤やや良い, ④どちらともいえない, ③やや悪い, ②かなり悪い, ①非常に悪い)。

2.3 「一レル」型に対する受容態度調査

「一レル」型に対する受容態度をみるアンケート項目をもうけ、自分の意見と一致するものにチェックしてもらった。本研究では、辛 (2003) の「ら抜き言葉」に対する自由記述にインフォーマントが回答した内容を 8 つのカテゴリーに分類し、各カテゴリー別に項目を作った。計 28 項目である。

3. 結果と考察

3.1 評価調査の分析

表 1 は「起きられる」, 「起きれる」, 「育てられる」, 「育てれる」, それぞれの表現に対する各尺度の平均値をまとめたものである。その平均値をグラフで表わすと、次の図 1 と図 2 のようになる。図 1 は「起きられる」: 「起きれる」を、図 2 は「育てられる」: 「育てれる」の評価を比較したものである。

表1 各尺度に対するインフォーマントの平均値

(単位: 点)

項目	対象	JNS				JSL								JFL[K]			
						JSL[C]				JSL[K]							
		I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV	I	II	III	IV
1. 良いー悪い		5.53	3.74	5.91	2.60	5.26	4.04	5.78	3.15	5.16	4.38	5.84	3.20	5.20	4.54	5.24	3.92
2. 標準的なー訛っている		5.52	4.17	6.02	2.93	6.11	3.48	6.15	2.89	5.96	3.72	5.92	2.98	5.72	3.60	5.90	3.22
3. 明るいー暗い		4.31	5.00	4.91	4.18	4.56	4.63	5.00	4.11	4.24	5.14	4.78	3.98	4.66	5.34	4.58	4.60
4. 正しいー間違った		5.92	3.06	6.17	2.42	5.96	3.41	6.04	2.59	6.04	4.04	5.96	3.00	5.98	3.84	5.76	3.34
5. 上品なー下品な		5.57	3.23	5.58	2.84	5.37	3.67	5.52	3.33	5.36	3.62	5.24	3.40	5.50	3.92	5.46	3.70
6. 固いー柔らかい		5.10	2.60	4.34	3.28	4.59	3.52	4.00	3.70	5.12	2.76	4.76	3.66	5.22	3.08	5.10	3.28
7. 形式まったー形式ばらない		5.17	2.33	4.44	2.51	4.89	3.07	4.37	3.19	5.04	2.88	4.98	2.90	5.60	2.96	5.30	3.14
8. 活発なー活発でない		3.68	4.93	4.00	4.25	3.56	4.67	3.96	3.96	3.82	4.88	4.08	4.22	4.06	4.90	4.10	4.32
9. 早いー遅い		3.42	4.96	3.74	4.45	3.70	4.63	3.93	4.30	3.60	5.12	3.82	4.28	3.56	5.08	3.90	4.34
10. 安定したー不安定な		4.84	3.75	5.23	3.05	4.70	3.78	5.33	3.33	4.72	4.00	5.30	3.08	5.00	3.96	5.24	3.50
11. ふつうのーふつうでない		4.76	4.50	5.58	2.92	4.85	4.33	5.67	3.48	4.86	4.62	5.32	3.12	5.00	4.22	5.08	3.76
12. 分かりやすいー分かりにくい		4.96	4.79	5.76	3.33	5.70	4.67	5.74	3.48	5.42	4.86	5.36	3.46	5.34	4.38	5.46	3.74
13. 新しいー古い		3.25	4.92	3.74	4.60	3.74	5.07	3.78	4.33	3.36	4.70	3.74	4.66	3.48	4.88	3.72	4.68
14. 好きなー嫌いな		4.32	4.18	5.27	2.84	4.56	4.30	5.19	3.37	4.22	4.38	4.76	3.24	4.50	4.44	4.64	4.04
15. 丁寧なー乱暴な		5.81	3.13	5.68	2.64	5.41	3.41	5.59	3.15	5.44	3.38	5.48	2.86	5.58	3.28	5.56	3.18

* 7点満点 * 「起きられる」はI, 「起きれる」はII, 「育てられる」はIII, 「育てれる」はIVで表す。

* JNSは日本語母語話者, JSL[C]は第二言語環境の中国語母語話者, JSL[K]は第二言語環境の韓国語母語話者, JFL[K]は外国語環境の韓国語母語話者を意味する。

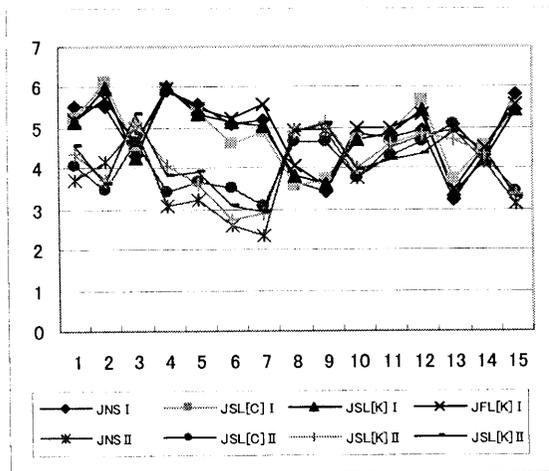


図1 「起きられる」(I)と「起きれる」(II)の評価

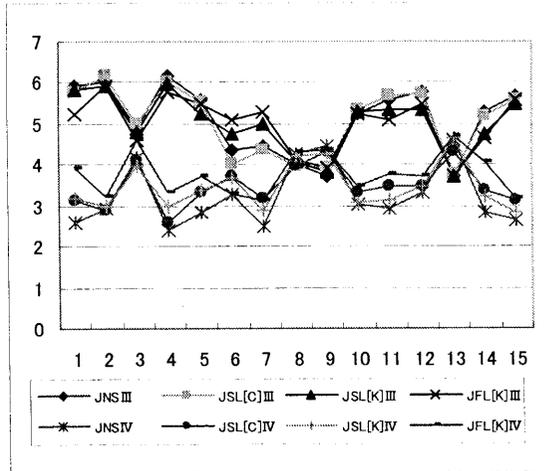


図2 「育てられる」(III)と「育てれる」(IV)の評価

一般に、評価得点が7点の方に近ければ近いほどプラスの評価を表し、1点の方に近ければ近いほどマイナスの評価を表す。図1と図2を比較してみると、「起きられる」:「起きれる」に対する評価得点のパターンと「育てられる」:「育てれる」に対する評価得点のパターンがかなり異なっていることがわかる(例:「良いー悪い」「標準的なー訛っている」「安定したー不安定な」「分かりやすいー分かり

にくい」「好きなー嫌いな」等)。例えば、「良いー悪い」という評価において、「起きられる」:「起きれる」の差はそれほど大きくないのに対し、「育てられる」:「育てれる」の差は大きい。また、同じ「ーラレル」型でも「起きれる」と「育てれる」の評価得点のパターンが異なっており(例:「良いー悪い」「分かりやすいー分かりにくい」「好きなー嫌いな」等)、同じ「ーラレル」型でも「起きられる」

と「育てられる」の評価パターンがかなり異なっている(例:「安定したー不安定な」「ふつうのーふつうでない」「新しいー古い」「好きなー嫌いな」等)。

次は、各尺度に対するインフォーマント別の結果を比較してみよう。図3は日本語母語話者【JNS】、

図4は第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】、図5は第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】、図6は外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】の結果をグラフで表したものである。

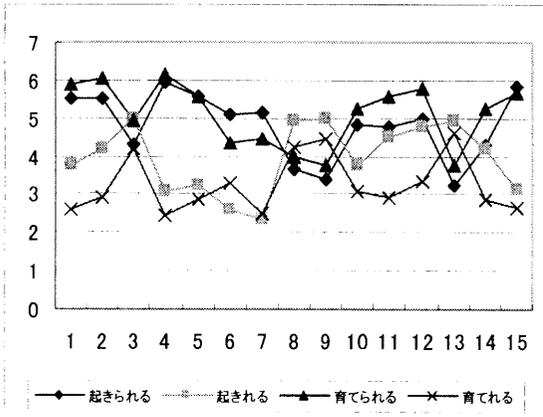


図3 日本語母語話者【JNS】の評価

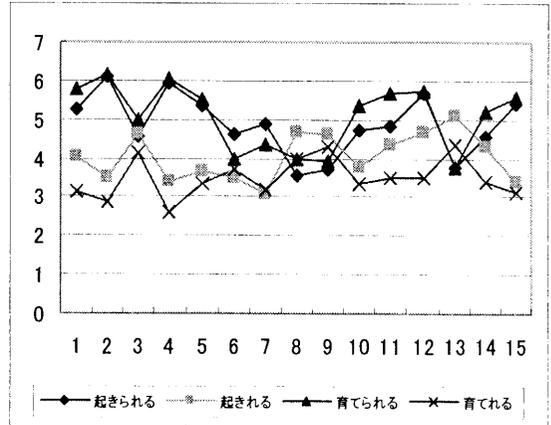


図4 第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】の評価

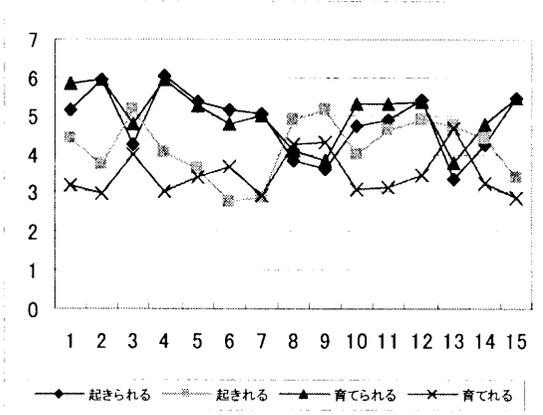


図5 第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】の評価

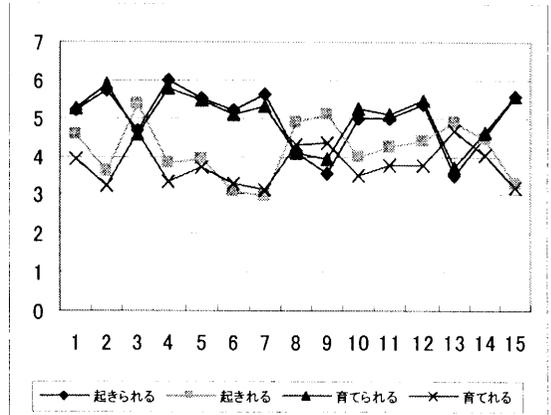


図6 外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】の評価

図3～図6をみると、各可能表現に対する評価において、各インフォーマント間にも違いがみられる。例えば、「育てれる」に対する「良いー悪い」の評価を比較すると、【JNS/JSL[C]/JSL[K】】に比べて【JFL[K】】の評価がかなり異なっていることがわかる。

以下では、①各可能表現間の比較、②各インフォーマント間の比較について詳しくみていくことにする。

3.1.1 各可能表現間の比較

3.1.1.1 「起きられる」:「起きれる」,「育てられる」:「育てれる」の評価

本節では、可能表現としての「ーレル」型と「ーラレル」型に対する評価を比較する。

表2は【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】の①「起きられる」:「起きれる」、②「育てられる」:「育てれる」の評価に対してt検定を行った結果、有意差が認められた項目をまとめたものである(両側検定,5%水準)。

表2: *t*検定の結果による「起きられる」:「起きれる」と「育てられる」:「育てれる」の評価の比較

表 現 インフォーマント	JNS	JSL		JFL[K]
		JSL[C]	JSL[K]	
「起きられる」>「起きれる」	①良い ②標準的な ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑫分かりやすい ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した, ⑫分かりやすい ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑮丁寧な
「起きられる」<「起きれる」	③明るい ⑧活発な ⑨早い ⑬新しい	⑧活発な ⑨早い ⑬新しい	③明るい ⑧活発な ⑨早い ⑬新しい	③明るい ⑧活発な ⑨早い ⑬新しい
「育てられる」>「育てれる」	①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑭好きな ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑤上品な ⑦形式ばった ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑭好きな ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑭好きな ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ④正しい ⑤上品な ⑥固い ⑦形式ばった ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑭好きな ⑮丁寧な
「育てられる」<「育てれる」	⑨早い ⑬新しい		⑬新しい	⑬新しい

表2の結果は、次のように解釈できる。

- ①【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】ともに、可能表現としては、「起きれる」よりは「起きられる」の方が正しくて標準的だと認識しており、「起きられる」の方をより規範的な表現として評価していると判断できる。
- ②【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】ともに、可能表現としては、「育てれる」よりは「育てられる」の方が正しくて標準的だと認識しており、「育てられる」の方をより規範的な表現として評価していると判断できる。
- ③【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】ともに、「起きられる」よりは「起きれる」の方を「活発な」「新しい」「早い」と評価している。
- ④【JNS/JSL[K]/JFL[K]】は、「育てられる」よりは「育てれる」の方を「新しい」と評価している。

以上、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】ともに、可能表現として「ーレル」型よりは「ーラレル」型の方を規範的な表現として高く評価しており、「ーラレル」型よりは「ーレル」型の方を新しい表現として評価している傾向が窺えた。

3.1.1.2 「起きられる」:「育てられる」, 「起きれる」:「育てれる」の評価

本節では、動詞による「ーレル」型に対する評価、「ーラレル」型に対する評価の比較を行う。

表3は【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】の①「起きられる」:「育てられる」, ②「起きれる」:「育てれる」の

評価に対して、*t*検定を行った結果、有意差が認められた項目をまとめたものである(両側検定, 5%水準)。

表3の結果は、次のように解釈できる。

- ①日本語母語話者【JNS】と第二言語環境の日本語学習者【JSL[C]/JSL[K]】は、同じ「ーラレル」型でも、「起きる」より「育てる」の「ーラレル」型に対する評価が高かった。
- ②一方、外国語環境の日本語学習者【JFL[K]】は「起きる」と「育てる」の「ーラレル」型に対する評価に違いがみられなかった。このことは、日本語母語話者【JNS】と第二言語環境の日本語学習者【JSL[C]/JSL[K]】は「起きられる」から「起きれる」への可能表現の移行が進んでいるが、外国語環境の日本語学習者【JFL[K]】は違いが認識できる段階に到達していないことを意味するものと解釈できる。
- ③【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K]】ともに、同じ「ーレル」型でも、「育てる」より「起きる」の方の「ーレル」型に対する評価が高いと判断できる。特に、日本語母語話者【JNS】の結果において、最もその傾向が目立っている。このことが「ーレル」型の使用率とも関係していると予想できる。

以上、「ーレル」型の使用率が高い「起きる」と使用率が低い「育てる」に対する評価を比較した結果、両者に違いがあることがわかった。評価の違いが「ーレル」型の使用率と関連していることが示唆された。

表3 t検定の結果による「起きられる」:「育てられる」と「起きれる」:「育てれる」の評価の比較

表 現	インフォーマント	JNS	JSL		JFL[K]
			JSL[C]	JFL[K]	
「起きられる」>「育てられる」		⑥固い ⑦形式ばった	⑥固い ⑦形式ばった		⑦形式ばった
「起きられる」<「育てられる」		①良い ②標準的な ③明るい ④活発な ⑨早い ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑬新しい ⑭好きな	①良い ③活発な ⑩安定した ⑪ふつうの ⑭好きな	①良い ③明るい ⑩安定した ⑪ふつうの ⑬新しい ⑭好きな	⑨早い
「起きれる」>「育てれる」		①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑤上品な ⑧活発な ⑨早い ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑬新しい ⑭好きな ⑮丁寧な	①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑧活発な ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑬新しい ⑭好きな	①良い ②標準的な ③明るい ④正しい ⑧活発な ⑨早い ⑩安定した ⑪ふつうの ⑫分かりやすい ⑭好きな ⑮丁寧な	①良い ③明るい ④正しい ⑧活発な ⑨早い ⑩安定した ⑫分かりやすい
「起きれる」<「育てれる」		⑥固い		⑥固い	

3.1.2 インフォーマント間の比較

本節では、各可能表現に対する各インフォーマント間の評価の比較を行う。

表4は、①日本語母語話者【JNS】:日本語学習者【JSL】、②中国語母語話者【JSL[C】】:韓国語母語話者【JSL[K】】、③第二言語環境の日本語学習者【JSL[K】】:外国語環境の日本語学習者【JFL[K】】の各可能表現への評価に対してt検定を行った結果、有意差が認められた項目をまとめたものである(両側検定, 5%水準)。

表4の結果は、次のように解釈できる。

(1) 日本語母語話者と日本語学習者の比較

①「起きられる」に対しては、さほど違いがみられなかった。ただ、「起きられる」に対して、日本語母語話者【JNS】は日本語学習者【JSL】より「丁寧な」表現と評価しており、日本語学習者【JSL】は日本語母語話者【JNS】より「標準的な」「分かりやすい」表現と評価していた。一方、「起きれる」に対しては、日本語母語話者【JNS】は日本語学

習者【JSL】よりも「標準的な」「柔らかい」「形式ばらない」表現と評価しており、日本語学習者【JSL】の方は日本語母語話者【JNS】よりも「良い」「正しい」「上品な」「丁寧な」表現と評価していることがわかった。

②「育てられる」に対しては、さほど違いがみられなかった。ただ、「育てられる」に対して、日本語母語話者【JNS】は日本語学習者【JSL】よりも「好きな」表現と評価していた。一方、「育てれる」に対しては、日本語母語話者【JNS】は日本語学習者【JSL】よりも「柔らかい」「形式ばらない」表現と評価しており、日本語学習者【JSL】は日本語母語話者【JNS】よりも「良い」「正しい」「上品な」「好きな」表現と評価していることがわかった。

以上のことは、第二言語環境の日本語学習者【JSL】は、日本語母語話者【JNS】に浸透している言語変種を母語話者【JNS】よりも高く評価している様子を示唆するものと思われる。

表4 t検定の結果によるインフォーマント間の各可能表現に対する評価の比較

インフォーマント 表 現	母語話者と学習者の比較		日本語学習者の母語による比較		学習環境による比較	
	母語話者【JNS】	日本語学習者【JSL】	中国語母語話者【JSL[C】】	韓国語母語話者【JSL[K】】	第二言語環境【JSL[K】】	外国語環境【JFL[K】】
「起きられる」	丁寧な	標準的な 分かりやすい				形式ばった
「起きれる」	標準的な 柔らかい 形式ばらない	良い, 正しい 上品な, 丁寧な		柔らかい		
「育てられる」	好きな			固い 形式ばった	良い	
「育てれる」	柔らかい 形式ばらない	良い, 正しい 上品な, 好きな				良い, 明るい ふつうの, 好きな

(2) 日本語学習者の母語による比較

①「起きられる」に対しても、「起きれる」に対しても、さほど違いがみられなかった。ただ、「起きられる」に対して、韓国語母語話者【JSL[K】】は中国語母語話者【JSL[C】】よりも「柔らかい」表現と評価していた。

②「育てられる」に対しても、「育てれる」に対しても、さほど違いがみられなかった。ただ、「育てられる」に対して、韓国語母語話者【JSL[K】】は中国語母語話者【JSL[C】】よりも「固い」「形式ばった」表現と評価していた。

以上、言語変種に対する評価において、日本語学習者の母語による違いはほとんどみられなかった。

(3) 日本語学習者の学習環境による比較

①「起きられる」に対しても、「起きれる」に対しても、さほど違いがみられなかった。ただ、「起きられる」に対して、外国語環境の日本語学習者【JFL[K】】は第二言語環境の日本語学習者【JSL[K】】よりも「形式ばった」表現と評価していた。

②「育てられる」に対しては、さほど違いがみられ

なかった。ただ、「育てられる」に対して、第二言語環境の日本語学習者【JSL[K】】は外国語環境の学習者【JFL[K】】よりも「良い」表現と評価していた。一方、「育てれる」に対しては、外国語環境の日本語学習者【JFL[K】】は第二言語環境の学習者【JSL[K】】よりも「良い」「明るい」「ふつうの」「好きな」表現と評価していることがわかった。

以上、日本語学習者の学習環境による比較においては、「ーラレル」型から「ーレル」型への移行が遅れている「育てれる」に対する評価において違いがみられた。

3.2 受容態度調査の分析

本節では、「ーレル」型に対する受容態度を調べるため、インフォーマントにチェックしてもらった28項目の結果を分析する。

表5は、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】の「ーレル」型に対する受容態度を問う設問の結果をまとめたものである。

図7は、その結果をグラフで表したものである。

表5 受容態度

(単位：%)

カテゴリー	設問で提示した意見	JNS	JSL		JFL[K]
			JSL[C]	JSL[K]	
使用意識	1-1 現在、「ら抜き言葉」を使っている。	82.1	59.3	60.0	24.5
	1-2 現在、「ら抜き言葉」を使っていない。	13.7	18.5	16.0	44.9
	1-3 以前は使っていなかったが、最近になって使うようになった。	8.4	55.6	48.0	40.8
	1-4 以前は使っていたが、最近になって使わなくなった。	8.4	0	0	8.2
規範意識	2-1 「ら抜き言葉」も意味さえ通じれば、別に気にならない。	74.7	81.5	72.0	67.4
	2-2 「ら」がないと、違和感があるし気になる。	21.1	25.9	20.0	18.4
	2-3 「ら抜き言葉」は正しい表現である。	11.6	3.7	8.0	8.2
	2-4 「ら抜き言葉」は間違った表現である。	30.5	33.3	16.0	20.4
	2-5 「ら抜き言葉」の使用に賛成である。	43.2	25.9	42.0	38.8
	2-6 「ら抜き言葉」の使用に反対である。	10.5	25.9	8.0	12.3
印象	3-1 「ら」が入った方が丁寧な印象を受ける。	70.5	59.3	58.0	65.3
	3-2 「ら」がないと乱暴な印象を受ける。	14.7	25.9	10.0	16.3
	3-3 「ら抜き言葉」から特別な印象は受けていない。	27.4	40.7	44.0	26.5
主観的 性格付け	4-1 「ら抜き言葉」の方が発音しやすい。	62.1	55.6	76.0	71.4
	4-2 「ら抜き言葉」の方が発音しにくい。	10.5	7.4	6.0	12.3
	4-3 「ら抜き言葉」の方が使いやすく便利である。	45.3	59.3	44.0	44.9
	4-4 「ら抜き言葉」の方が使いにくくて不便である。	5.3	3.7	4.0	16.3
	4-5 「ら抜き言葉」の方が意味が分かりやすくなる。	27.4	22.2	12.0	16.3
	4-6 「ら抜き言葉」の方が意味が分かりにくくなる。	16.8	33.3	20.0	36.7
客観的 性格付け	5-1 「ら抜き言葉」は時代の変化に伴う言語変化の自然な現象である。	79.0	81.5	92.0	89.8
	5-2 「ら抜き言葉」は尊敬・受け身表現との区別ができてよい。	28.4	37.0	22.0	16.3
場面による 使い分け意識	6-1 「ら抜き言葉」は書き言葉やあらたまった場面での使用は控えている。	81.1	81.5	64.0	40.8
	6-2 「ら抜き言葉」は年上の人と公の場では使わないようにしている。	68.4	70.4	60.0	53.1
	6-3 「ら抜き言葉」はすべての場面で相手に構わず使っている。	9.5	3.7	0	8.2
動詞による 使い分け意識	7-1 「ら抜き言葉」は語により使われる語と使われない語がある。	72.6	66.7	76.0	40.8
	7-2 「ら抜き言葉」はすべての語(動詞)で使われている。	4.2	3.7	0	2.0
習得のニーズ	8-1 「ら抜き言葉」は生活の中で自然に習得できるので、授業の中でわざわざ学習する必要はない。	39.0	37.0	44.0	24.5
	8-2 「ら抜き言葉」も授業の中で正式に取り上げる必要がある。	44.2	51.9	54.0	77.6

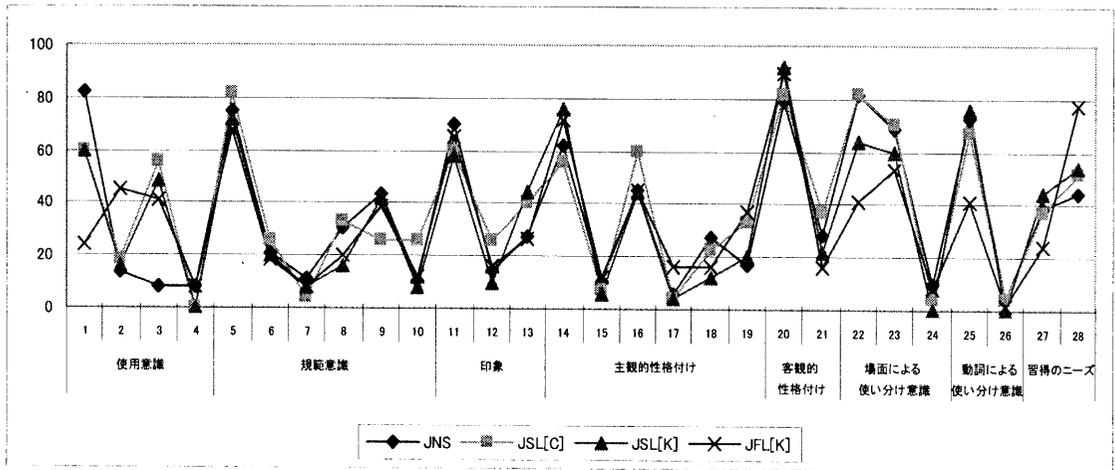


図7 受容態度の結果

上記の結果は、次のように解釈できる。

- ①「1-1 現在『ら抜き言葉』を使っている」という設問の回答においては、日本語母語話者【JNS】(82.1%) > 第二言語環境の韓国語母語話者【JSL[K】】(60.0%) > 第二言語環境の中国語母語話者【JSL[C】】(59.3%) > 外国語環境の韓国語母語話者【JFL[K】】(24.5%)の順であった。このうち、外国語環境の日本語学習者【JFL[K】】は、さらに日本滞在経験のないグループとあるグループに分けられる。その傾向をみてみると、日本滞在歴のない方が11.1%で、日本滞在歴のある方は32.3%という結果が得られた。
- ②日本語学習者【JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】は日本語母語話者【JNS】に比べ、「1-3 以前は使っていなかったが、最近になって使うようになった」という使用への変化が目立っている。
- ③外国語環境の日本語学習者【JFL[K】】は、「1-1 現在『ら抜き言葉』を使っている」へのチェック(24.5%)よりも、「1-3 以前は使っていなかったが、最近になって使うようになった」へのチェック(40.8%)が多かった。これは、日本国内の学習者に比べ、日常の場面で日本語を使う機会が少ない【JFL[K】】は、最近になって使うようにはなったが、「現在、使っている」と言えるほどの割合ではないと判断した結果によるものと思われる。
- ④「一レル」型に対する規範意識を問う設問では、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】ともに「2-1 『ら抜き言葉』も意味さえ通じれば、別に気にならない」へのチェックが多かった。
- ⑤「一レル」型に対する印象を問う設問では、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】ともに、「3-1 『ら』が入った方が丁寧な印象を受ける」という項目へのチェックが多かった。一方、「3-3 『ら抜き言葉』から特別な印象は受けていない」に対しては【JSL】は4割以上がチェックしている。このことは、「一ラレル」型の方から丁寧な印象を受けるが、母語話者が日常で普通に使っている現状を、自然に受け入れていることを示唆するものと思われる。それに比べ【JFL】はそのような環境にはおかれていないため、2割台に止まっていると解釈できる。
- ⑥「一レル」型に対する主観的性格付けを問う設問では、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】ともに、「4-1 『ら抜き言葉』の方が発音しやすい」、「4-3 『ら抜き言葉』の方が使いやすく便利である」ととらえており、これらが「一レル」型の使用に影響を与えている要因の一つになっていると思われる。
- ⑦「一レル」型の場面による使い分け意識を問う設問では、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】】ともに、「6-1 『ら抜き言葉』は書き言葉やあらたまった場面での使用は控えている」、「6-2 『ら抜き言葉』は年上の人と公の場では使わないようにしている」という傾向が強かった。これは場面と相手による「一レル」型・「一ラレル」型の使い分けを示唆するものと思われる。「6-1 『ら抜き言葉』は書き言葉やあらたまった場面での使用は控えている」へは【JNS/JSL[C]/JSL[K】】は6割以上がチェックしているのに対し、【JFL[K】】は4割に止まっている。

これには、日本国内よりも日本語が使える機会が制限されている環境が影響していると思われる。

- ⑧「ーレル」型の動詞による使い分け意識を問う設問では、【JNS/JSL[C]/JSL[K]/JFL[K】ともに、「7-1 『ら抜き言葉』は語により使われる語と使われない語がある」へのチェックが多く、動詞による使い分けを意識していることがわかる。しかし、【JNS/JSL[C]/JSL[K】は7割近くの人がチェックしているのに対し、【JFL[K】は4割に止まっている。これは、よく使われる語と使われない語が判別できる環境に恵まれている日本国内のインフォーマントに比べ、インプットの量が遥かに少ない学習環境が影響している結果であると分析できる。
- ⑨「8-2 『ら抜き言葉』も授業の中で正式に取り上げる必要がある」という設問には、日本語母語話者【JNS】は4割以上が、第二言語環境の日本語学習者【JSL[C]/JSL[K】は5割以上、外国語環境の日本語学習者【JFL[K】は7割以上のインフォーマントがチェックしており、インフォーマントの「ーレル」型習得のニーズを反映していると分析できる。
- ⑩外国語環境の日本語学習者【JFL[K】を日本滞在経験のないグループとあるグループに分けその傾向をみてみると、日本滞在経験のないグループは66.7%、日本滞在経験のあるグループは83.9%となり、第二言語環境を経験したグループのニーズが最も高いことがわかった。このことは、授業で教わった日本語と実際の場面使われている日本語のギャップを切実に体感した経験に基づいた日本語学習者のニーズの表出であると解釈できる。

4. まとめと課題

本研究の調査結果は、次のようにまとめられる。

- ①「ーレル」型の使用率の高い「起きる」と、使用率の低い「育てる」に対する評価を比較した結果、同じ「ーレル」型でも「育てる」よりは「起きる」の「ーレル」型に対する評価が高かった。
- ②場面と相手及び動詞により「ーレル」型と「ーラレル」型の使い分けを示唆する傾向が見受けられた。
- ③外国語環境の日本語学習者の場合は、第二言語環境の日本語学習者よりも、授業での取り入れを強

く希望している様子が窺えた。

- ④第二言語環境の日本語学習者は、日本語母語話者に浸透している言語変種を母語話者よりも高く評価している傾向が読み取れた。
- ⑤言語変種に対する評価と受容態度において、日本語学習者の母語による違いはほとんどみられなかった。
- ⑥日本語学習者の学習環境の違いが言語変種に対する評価と受容態度に影響していることが示唆された。
- 以上、「ーレル」型に対しての感覚的な評価を調べた結果、評価の違いが「ーレル」型の使用率と関連していることが示唆されたが、このことに関しては稿を改めて詳しく論じたい。「ーレル」型についての意見・信念を調査した結果、「ーレル」型は主にインフォーマルな場面における話し言葉としての認識が強いことがわかった。しかし、政治家の発言、新聞記事など、フォーマルな場面や書き言葉における「ーレル」型の用例も報告されているので、実際の場面において、きちんとした使い分けが行われているかについては、今後実態調査を行う予定である。

今回は、日本語学習者の学習レベルを上級に揃えた。今後は日本語学習者のレベルによってはどういふ結果が得られるのかをみていきたい。

参考文献

- 井上文子 (1991) 「男女の違いから見たことばの世代差“標準”意識が男女差をつくる」『月刊日本語』6月号、14-18.
- 生越直樹 (1991) 「日本語教育と方言」『新・方言学を学ぶひとのために』世界思想社 231-241.
- 加治木美奈子 (1996) 「“日本語の乱れ”意識は止まらない～第10回現代人の言語環境調査から②～」『NHK放送研究と調査』46(9)、60-62.
- 辛昭静 (2002b) 「言語変化に対する意識と行動の比較研究—ら抜き言葉を例として—」『社会言語科学』5(1)、115-126.
- 辛昭静 (2003) 「『ら抜き言葉』の使用率に影響する言語内の要因と外的要因」『計量国語学』24(2)、94-108.
- 辛昭静 (2004) 「日本語教育における言語変種の受容・普及に関する社会言語学的研究—「ーレル」型可能表現を事例として—」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士論文
- 中本正智 (1985) 「東京語のゆれについての考察」『東京都立大学人文学会 人文学報』173、164-168.

Language consciousness of linguistic variation

—The case of the ‘ra-nuki’ potential form (innovative potential forms)—

SHIN Sojung

Abstract

This study examines the case of ‘ra-nuki’ verbs (innovative potential forms) as an example of language variations spreading steadily in conversational speech among native Japanese speakers. Appraisal and attitude of acceptance of ‘ra-nuki’ verbs among different speaker groups (i.e., native Japanese speakers, learners of Japanese as a second vs. foreign language) are compared.

- (1) A difference was discovered between the two groups in a comparison of their appraisal of the widely used ‘ra-nuki’ verb ‘okiru’ and the infrequently used ‘sodateru’. Specifically, ‘okireru’ (the ‘ra-nuki’ form of ‘okiru’) was more highly regarded than ‘sodatereru’ (the ‘ra-nuki’ form of ‘sodateru’)
- (2) The frequency of ‘ra-nuki’ verbs use depends on the situation, the addressee and the verb.
- (3) It was observed that learners of Japanese in a foreign language environment have a stronger motivation than their counterpart second language learners to have ‘ra-nuki’ forms taught in the classroom. Among those, such needs were even greater for the group of learners who had prior experience in learning Japanese in a second-language setting.
- (4) Learners of Japanese in a second language setting had a higher regard than did native Japanese speakers for the linguistic variations prevalent among native speakers.
- (5) The comparison of Japanese learners’ appraisal and attitude of acceptance of linguistic variation did not indicate a significant difference according to the learners’ native language.
- (6) The results suggest that differences in learning environment affect the appraisal and attitude of acceptance of Japanese learners.

【Keywords】 appraisal, attitude of acceptance, learning environment, native language, acquisition needs

(Ochanomizu University, Institute for Humanities and Sciences)